

現地を訪問して想うこと

村橋 舞子（1995・文）

あの震災が起きてから 3 年半、何か自分にできることはないか…と常に考えていましたが、立命館の校友であったお陰で、このような貴重な体験ができ感謝しています。

私たちが行く先々で目にした被災地の風景は、どこもまだ復興の途中ではあるものの、3 年半という年月の中で、津波の恐ろしい痕跡はほとんど残っていませんでした。ただ、石巻・女川・閑上など、津波が町を飲み込んだ地域では今、道の両脇に雑草(セイタカアワダチソウ)が延々と広がっています。3 年半前のあの日まで、ここには家や店や工場が建ち並んでいたと聞き、改めて胸が痛みました。

自分の大切な人や家、工場、町を流され、絶望のどん底にあった方々が、それでも諦めず前へ進もうとして、もう一度ゼロから会社や町を再建していかれた強い思いを目の当たりにして、心から応援していきたい、という気持ちになりました。と同時に、こうして頑張っておられる被災地の方々から、困難に直面しても決して逃げない、諦めない事の大切さを教えられました。

被災地では国からの援助(補助金)を受けているとはいえ、マイナスからのスタートで厳しい経営状況の水産加工会社その他が多くあります。宮城県校友である「さき圭」さん、「木の屋石巻水産」さんを始め、被災地でも頑張っている方々に思いをはせ、できるだけ被災地のものを購入すること…これが今そしてこれからも私たちにできる復興支援だと考えます。